

「職は世につれ」

晴子さんは努力家で成績はいつもトップクラス。しかし、兄弟が多く大学進学はあきらめなくてはなりません。そのかわり、女子のトップのみが推薦される電電公社の電話交換手に採用されました。

その晴子さんと競っていた公子さんは、中国からの引揚孤児でした。叔父さん夫妻に引き取られた身としては大学進学とは言いかねたのでしよう、高校を卒業すると私鉄に採用され、「バスガール」になりました。男子で常に級長をつとめていた親友の栄三君は、工業高校から名門大手の電機会社に就職し、当時の花形部門の真空管工場に配属されました。それから十数年後、筆者がその会社を訪問した時、何百人とも知れない作業員が一直線に並ぶ真空管組立ラインで働く栄三君をちらっと見たのが、私が彼に会った最後です。

真一君は、商業高校を卒業するや自宅から通勤できる生糸製糸会社に職を得ました。この時代、山梨県の果樹生産は緒に付いたばかり、養蚕が主力農産品でし

たから、県内いたるところに製糸工場があつて、女性を主として非常に多くの人々が雇用されておりました。1960年代初等、県内で本格的な工業と言えれば蚕糸業くらいしか無かつたのです。

こんな古い話を持ち出したのは他でもありません。電話交換手、バスガイド、真空管工場や絹糸工場等々今やどこを探してもそんな職種や職場はありません。その消えた数も、半端ではありません。これらの産業分野で雇用していた労働人口は何千万人という数にのぼり、その数値が現代の非正規雇用者数にほぼ附合するようです。そしてこれが1世代か1.5世代という瞬く間に起こつた「事件」でした。

グロ―バリズムなどという言葉すらなかつた時代にこれだけの大変化。これらの時代の栄枯盛衰の中、どういふ産業が消え、どういふ仕事が生まれてくるのでしょうか。その変遷が、若い人たち一人一人の人生に甚大な影響を与えずにはおきません。時あたかも新年、すっかり人生の標的を定めておきたいものです。